

6/2004  
外交  
71-76

巻頭随筆

# 日本人作家がクールな理由

## 酒井弘樹

ヴァーティカル社代表

さかい ひろき  
日本経済新聞社(出版局編集部)、日経BPP社「日経ビジネス」記者を経て、一九九八年渡米。二〇〇一年Vertical, Inc.を設立。ニューヨーク在住。

ニューヨーク、マンハッタンにある私たちの小さなオフィスには、今年に入ってハリウッド関係者からの電話が引きもきらない。私たちの会社(ヴァーティカル)は、日本の現代小説やノンフィクション、良質のマンガなどを英訳し、米国の一般大衆に向けて投入しているところとする出版ベンチャーで、昨年に一〇冊を刊行、今年は一七冊の新作を予定している。

ハリウッド関係者が目をつけたきっかけは、「ニューヨーク・タイムズ」や「サンフランシスコ・クロニクル」などの主要紙が、当社に関する記事を大きく掲載してくれたことによる。いわゆる「クール・ジャパニーズ」と呼ばれるブームのなかで、「アニメ

やゲームだけでなく、小説の分野でも新たな動きが始まった」この出版不況のなかでチャレンジ的な試み「意外に興が深い日本のエンタテインメント」といったトーンなのだが、これがコンテンツ不足に悩むハリウッドの興味を引いたようだ。

昨年出版したRing(鈴木光司著、原題「リング」)はすでに米国でリメイク映画がつくられているので交渉の範囲外だが、The Guin Saga(栗本薫著、「グイン・サーガ」は、ハリ・ポッターや指輪物語に次ぐファンタジーの原作として期待が大きい。さらに、Strangers(山田太一著、「異人たちの夏」)やAshes(北方謙三著、「棒の哀しみ」)、Tumble Tumble(江國香織著、「ギョ

きらひかる」などに興味をもつ人も多い。正直に言うと、本自体の売れ行きは、まだまだベストセラーとは言いがたい。日本では有名でも米国では無名の新人である作家を売り出すには、予想していたよりも時間がかかるというのが実感だ。ただ、どの書籍も新聞や雑誌の書評では高く評価されているので、あとはそれが一般大衆に認知されるまで「継続あるのみ」である。

ここに至ってブームの兆しを見せ始めているのは、手塚治虫さんの『ブッダ』。合計二〇〇〇頁のこの作品を、ヴァーティカルではハードカバー八冊分で刊行中だが、雑誌『タイム』に取り上げられたこともあり、これまで「マンガなんて子どもが読むもの」と一方的に信じ込んでいた米国の大人たちの考えに風穴を開けつつある。

私たちの試みはまだ小さく、始まったばかりだ。しかし、たったこれだけの試みでも、リメイクでも字幕スパーでも吹き替えでもなく、日本の小説を原作としてハリウッドでシナリオが書かれ映画化される可能性が生まれるなど、さまざまなことが起り始めている。日本人作家の可能性に大いに注目していただければ幸せである。